

パソコンに対する養護教諭の認識に関する研究

—パソコンの使用者群と不使用者群の比較より—

棟方百熊*, 中安紀美子**

(キーワード: 養護教諭, 保健室, パソコン, 使用者, 不使用者)

I. 緒言

学校へのコンピュータの設置やインターネットへの接続が推進されている^{1), 2), 3), 4)}。「我が国の文教施策」^{3), 4)}によると、ミレニアム・プロジェクト等により、教育用コンピュータの配置、学校のパソコンのインターネットへの接続、教員研修等が推進されている。平成11年度末の時点で、教育用コンピュータの設置台数は目標の92.2%、インターネットへの接続は目標の57.4%が達成されている。また、コンピュータを操作できる教員の割合は66.1%、指導できる教員の割合は31.8%に達していると報告されている。今後さらに計画が推進される見込みであるという。

学校へのパソコンの導入に関する研究は数多くなされてきた。それらは、授業での活用と、学校の運営管理に大きく二分される。このうちの後者の中で、さらに学校保健分野においては、保健室や養護教諭に関わる調査や研究もなされてきている^{5), 6), 7), 8), 9)}。

本研究は、養護教諭が保健室の運営を行う中で、パソコンについて現在どのような環境にあり、また、どのようにそれを認識しているのかについて行われた調査¹⁰⁾の一部を分析、報告するものである。

II. 方法

1. 調査対象

平成12年4月現在、徳島県下の小学校、中学校、高等学校、養護学校に勤務している養護教諭382名を対象とした。回収数は258名、回収率は67.5%であった。

2. 調査時期、調査方法、調査内容

調査時期は平成12年8月から9月である。

調査方法は質問紙を用いた郵送調査である。

調査内容は、平成5から7年度にかけて財団法人日本学校保健会の「学校保健情報の処理と活用研究委員会」

が行った調査研究の報告書⁵⁾を参考にし、(1)調査対象の基本属性及び勤務校について、(2)勤務校内及び保健室のパソコン環境について、(3)保健室へのパソコンの導入について、(4)パソコン使用観及びインターネットについて、の4項目を設定し、(3)についてはパソコン使用者と不使用者を分けて設問を作成した。

本論文においては、パソコンの使用に対する認識に関して、全員を対象とした設問のうちで養護教諭及び保健室に関連が深いと考えられる項目について、主としてパソコンの使用者と不使用者を比較する手法を用い、有効回答者219名を分析対象とした。なお、パソコンの使用者及び不使用者の各群の個別の特徴については、既に報告したとおりである^{11), 12)}。

III. 結果

1. 回答者の基本属性及び勤務校

対象者の年齢構成は次の通りである。最年少者が23才、最年長者が60才であり、平均年齢は45.0才であった。多数を占めた順に、40歳代113名(51.6%)、50歳代54名(24.7%)、30歳代37名(16.9%)、20歳代15名(6.8%)であった。

養護教諭としての勤務経験は、表1の通りである。最短で1年、最長で37年であり、平均年数は21.1年であった。

多数を占めたのは21年から25年53名(24.2%)、26年から30年51名(23.3%)、31年以上28名(12.8%)の順であった。

取得している免許状(複数回答)の種類は、表2の通りである。養護教諭1種204名(93.2%)が最も多く、中学校教諭131名(59.8%)、看護師67名(30.6%)の順であった。

表1 勤続年数

勤続年数	人数(%)
1～5	6.4
6～10	11.0
11～15	10.5
16～20	11.9
21～25	24.2
26～30	23.3
31～	12.8
合計	100.0

* 鳴門教育大学生活・健康系(保健体育)教育講座

** 徳島大学総合科学部人間社会学科行動科学

表2 取得免許

免許の種類 (複数回答)	人数 (%)
養護教諭1種	93.2
養護教諭2種	8.7
小学校教諭	5.0
中学校教諭	59.8
高等学校教諭	21.9
保健師	2.7
看護師	30.6
その他	5.5

表3 生徒数

生徒数	校数 (%)
1～50	21.5
51～100	11.9
101～500	48.4
501～1000	13.7
1001～	4.6
合計	100.0

表4 学級数

学級数	校数 (%)
1～5	18.3
6～10	42.5
11～15	19.6
16～20	8.2
21～	11.4
合計	100.0

表5 平均来室者数/1日

来室者数	校数 (%)
～10	55.7
10～20	22.4
20～30	13.2
30～40	4.1
40～50	4.6
50～	0.0
合計	100.0

勤務校の校種は次の通りである。小学校136名(62.1%)、中学校55名(25.1%)、高等学校・全日制18名(8.2%)、高等学校・定時制4名(1.8%)、その他6名(2.7%)であった。

勤務校の児童・生徒数は、表3の通りである。最少が7名、最多が2332名であり、平均は288.6名であった。101名から500名106校(48.4%)が最も多く、1名から50名47校(21.5%)、501名から1000名30校(13.7%)の順であった。

勤務校の学級数は、表4の通りである。最少が3学級、最多が46学級であり、平均は10.8学級であった。6学級から10学級93校(42.5%)が最も多く、11学級から15学級43校(19.6%)、1学級から5学級40校(18.3%)の順であった。

養護教諭の配置数は次の通りである。複数配置の学校8名(3.7%)、複数配置ではない学校211名(96.3%)であった。

保健室への一日あたりの平均のべ来室者数は、表5の通りである。最少が0.01名、最多が150名であり、平均は15.1名であった。0名から10名未満122校(55.7%)が最も多く、10名から20名未満49校(22.4%)、20名から30名未満29校(13.2%)の順であった。

自宅のパソコンの有無は、次の通りである。自宅にパソコンが無い者38名(17.4%)、自宅にパソコンが有る者181名(82.6%)であった。

パソコンの使用は、次の通りである。使用していない

者は64名(29.2%)、使用している者は155名(70.8%)であった。

2. パソコンの使用に関する認識

パソコンに対する苦手意識については、次の通りである。非常に強い苦手意識がある19名(8.7%)、強い苦手意識がある59名(26.9%)、時には苦手意識を感じることもある98名(44.7%)、あまり苦手意識はない37名(16.9%)、まったく苦手意識はない6名(2.7%)であった。

今後の一般的なパソコン使用の変化に関する認識については、次の通りである。急激に増加する123名(56.2%)、徐々に増加する89名(40.6%)、現状とあまり変わらない7名(3.2%)、徐々に減少する0名(0.0%)、急激に減少する0名(0.0%)であった。

養護教諭として、パソコンの使用にどのように対応したらよいかに関する認識については、次の通りである。積極的に活用する134名(61.2%)、余裕のある人は活用する81名(37.0%)、活用する必要はない0名(0.0%)、その他4名(1.8%)であった。

養護教諭のためのパソコン講習会への参加希望については、次の通りである。希望しない14名(6.4%)、希望する205名(93.6%)であった。

保健室にパソコンは必要だと思うかどうかに関しては、次の通りである。必要だと思う208名(95.0%)、必要ではないと思う11名(5.0%)であった。

3. パソコン等使用者の属性と保健室へのパソコンの導入の関連

自分でパソコンを使っているかどうかと、パソコンの使用に関する認識に関する設問の回答をクロス集計し、 χ^2 検定を行った結果、1項目で0.1%の危険率で有意差がみられ、1項目で1%の危険率で有意差がみられ、1項目で5%の危険率で有意差がみられた。なお、表6～8は横軸が題目の前半、縦軸が後半を示している。単位はパーセントである。

パソコンに対する苦手意識とパソコンの使用のクロス集計(表6)からは、0.1%の危険率で独立であることが判明し、パソコンを自分で使用しているか否かに関わらず、苦手意識が強いことが分かる。

一般的なパソコン使用の変化に関する認識とパソコンの使用のクロス集計からは、有意差はみられなかった。

養護教諭としてのパソコン使用への対応とパソコンの使用のクロス集計(表7)からは、5%の危険率で独立であることが判明し、パソコンを自分で使用しているか否かに関わらず、今後パソコンを活用していくべきであるとの認識が強いことが分かる。

講習会への参加希望とパソコンの使用のクロス集計からは、有意差はみられなかった。

表6 パソコンに対する苦手意識とパソコンの使用

	非常に強い	強い	時には感じる	あまりない	まったくない	計
パソコン不使用	5.0	14.2	6.8	2.7	0.5	29.2
パソコン使用	3.7	12.8	37.9	14.2	2.3	70.8
合計	8.7	26.9	44.7	16.9	2.7	100.0

$X^2 = 35.724$, $df = 4$, $p < 0.001$

表7 養護教諭としてのパソコン使用への対応とパソコンの使用

	積極的に活用	余裕のある人は活用	活用する必要はない	その他	計
パソコン不使用	14.2	13.7	1.4	0.0	29.2
パソコン使用	47.0	23.3	0.5	0.0	70.8
合計	61.2	37.0	1.8	0.0	100.0

$X^2 = 8.846$, $df = 2$, $p < 0.05$

表8 保健室でのパソコンの必要性とパソコンの使用

	必要	不必要	計
パソコン不使用	25.6	3.7	29.2
パソコン使用	69.4	1.4	70.8
合計	95.0	5.0	100.0

$X^2 = 10.597$, $df = 1$, $p < 0.01$

保健室でのパソコンの必要性とパソコンの使用のクロス集計(表8)からは、1%の危険率で独立であることが判明し、パソコンを自分で使用しているか否かに関わらず、保健室でのパソコンの必要性を強く認識していることが分かる。

IV. 考 察

平成13年度学校教員統計調査中間報告⁹⁾によると、小学校教員の平均年齢は43.4歳、中学校教員の平均年齢は41.8歳、高等学校教員の平均年齢は43.8歳であり、各校種における最も割合の高い年齢区分は、小学校では45歳以上50歳未満(21.1%)、中学校では40歳以上45歳未満(21.8%)、高等学校では40歳以上45歳未満(17.2%)となっている。また、調査地域における教員の平均年齢は、小学校43.1歳(女性42.7歳、男性43.8歳)、中学校41.3歳(女性40.9歳、男性41.7歳)、高等学校41.8歳(女性39.4歳、男性43.2歳)である。なお、調査対象の平均年齢が、調査地域における平均年齢よりもやや高いことは既に報告した通りである¹⁰⁾。

本論文における分析対象の平均年齢も、同様の傾向を示し、高年齢化が進行していると言える。勤続年数に関しても同様である。

児童・生徒数は、50名以下と101～500名の2カ所にピークが見られ、学級数は、6～10クラスにピークが見られる。対象とした校種が、小学校が約60%、中学校が約25%、高等学校が約10%であることから、高等学校が大規模であること及び小規模の小学校が多いことが原因として推測される。

養護教諭が複数配置されている学校は、極めてわずか(3.7%)であり、今般の社会情勢を鑑みると、今後の改善が望まれるところである。

保健室の利用状況は、1日あたり10名以下が過半数を占め、30名以下が9割を越えている。来室理由等との関連についての分析を要するが、生徒数等の影響がうかがわれる。

自宅にパソコンを所有していない者が約2割弱存在した。仕事にパソコンを使用することの増加と、パソコンの個人所有との関係は明確ではないため、この割合の増減については不明確である。

パソコンの使用については、3割が使用していないが、前述の政策も推進され、今後は使用することに対する社会的な圧力が次第に強くなる可能性が推察される。

パソコンに対する苦手意識が強く存在しているが、対象者の年齢層を考慮すると当然とも言えよう。このような対象者群に対してパソコンの使用が推奨される場合、計画的に研修を行うなどの手だてが必要不可欠であろう。

今後の一般的なパソコン使用の変化に関する認識については、ほとんどの者が増加すると考えており、実際の社会情勢と乖離していないと考えられる。

養護教諭として、パソコンの使用にどのように対応したらよいかに関する認識については、積極的に活用するとの認識を示した者が6割を越えており、その必要性は十分に認知されていると言える。

養護教諭のためのパソコン講習会への参加希望については、9割以上の者が希望すると回答しており、研修の機会の充実が求められていることを示していると考えられる。

保健室にパソコンは必要だと思うかどうかに関しては、9割以上が必要であると回答しており、保健室へのパソコンの配置が求められていることを示していると考えられる。

パソコンに対する苦手意識とパソコンの使用のクロス集計(表6)からは、概して苦手意識が強いことがわかるが、パソコン使用者群においては苦手意識があまりな

い及びまったくないと回答者が合計15%以上おり、パソコンを使用することにより苦手意識が解消される方向へ変化していく可能性が示唆されている。

養護教諭としてのパソコン使用への対応とパソコンの使用のクロス集計(表7)からは、パソコン使用者群では、積極的に活用と余裕のある人は活用の比がおよそ2対1であるのに対して、パソコン不使用者群ではほぼ1対1である。このことから、今後パソコンを活用していくべきであるとの認識を持ちながらも、パソコン不使用者群においては、より積極的な活用への抵抗感が強いことがうかがわれる。

保健室でのパソコンの必要性和パソコンの使用のクロス集計(表8)からは、パソコン使用者群の98.1%、パソコン不使用者群の87.5%がパソコンを必要と認識していることから、既に保健室でのパソコンの活用が社会的な圧力として感じ取られていることが推察される。

V. 結 語

パソコンに対しては大きな苦手意識を持っているが、パソコンが今後一層と急激に人口へ膾炙することを予想し、保健室でのパソコンの活用に関しても必要であると認識している。そして、養護教諭としてはできれば積極的に、せめて前向きにパソコンを活用する必要があると考え、そのための講習会等があれば参加したいと思っている。今回の分析対象である養護教諭像の一例として、以上のようなものが挙げられよう。

養護教諭及び保健室は、現在、非常に多くの期待を背負っている。健康診断やケガなどの救急処置はもちろんのこと、心理的な側面に関する対応や、家庭との連携、教科の教育への参画等、数え上げればきりが無いほどである。このような状況に伴い、養護教諭及び保健室には大量の情報が集積されている。健康診断の記録、保健室の利用記録、授業の教材等、これらの中には個人情報として保護されるべきものや、整理されつつ集積され続けるものなどが含まれる。また、保健室をあくまでただ一人の養護教諭である場合がほとんどである。さまざまな措置により、この状況を解消すべく努力はされているが、大きな進展が見られたとは言い難い。

パソコンを有効に活用すると、これらの状況から一歩でも前に進むための補助とすることが可能であると考えられる。情報の整理や分析、定型文書の作成によって事務作業の軽減が図れるほか、インターネットへの接続により、情報の収集及び発信が、校内ネットワークを構築することにより多くの情報の共有化が図れる。さらには、各学校に一人であることの多い養護教諭の、同職種の人の連携や相互補助が可能となるような使い方まで想定できるのである。しかし、これらの実現のためには、第

一に相当量のパソコン配置やネットワーク敷設といったものに対する予算措置を要し、次いで使いこなすための研修が頻繁に行われねばならないが、これらが潤沢であるとは言えない。また、継続的な使用に耐えるためのメンテナンス作業や、大規模・高共有価値情報の入力に対する人的補助などの必要性も生じてくる。さらに重要なことは、個人情報の流出や不正アクセスへの対処を考慮したセキュリティの確立である。

このように考えていくと、現状がまだまだ不十分に思えてくる。しかし、社会状況としては、既にそのような世界へ向かって第一歩を踏み出しており、いずれその波は教育界、ひいては養護教諭や保健室といったものにまで及ぶことは明白である。

従って、今後さらに詳細な分析を行い、また、先行研究との比較対照も行い、今後ますます増加してゆくであろうパソコンをスムーズに日常の業務に活用していくための方策を見出すことが課題である。

終わりに、お忙しいなか本調査にご協力いただいた、徳島県の小学校・中学校・高等学校・養護学校の養護教諭の先生方に深く御礼を申し上げます。

VI. 文 献

- 1) 文部省, 平成10年度学校教員統計調査, 1998
- 2) 文部科学省, 平成13年度学校教員統計調査中間報告(文部科学省のHPより), 2002
- 3) 文部省, 我が国の文教施策(平成11年度), 1999
- 4) 文部科学省, 我が国の文教施策(平成12年度), 2000
- 5) 財団法人日本学校保健会, 学校保健情報の処理と活用研究委員会報告書, 財団法人日本学校保健会, 1996
- 6) 特集 新世紀の保健問題とコンピュータ, 保健の科学, 2000, 42-8, 杏林書院
- 7) 澤 栄美, 養護教諭のためのパソコン活用法, 大修館書店, 2001
- 8) 長谷川ちゆ子, 養護教諭のパソコン活用に対する関心と状況(第2報), 学校保健研究, 31-suppl., 1989, 266
- 9) 辻 立世, 情報化時代の学校保健活動・養護教諭の職務④インターネット・イントラネットと保健室の仕事, 学校保健のひろば(体育科教育2000.7別冊), 48-11, 2000, 96-99
- 10) 棟方百熊他, 養護教諭とパソコンに関する調査研究, 鳴門教育大学研究紀要, 第16巻, 2001, 29-39
- 11) 棟方百熊他, 養護教諭とパソコンに関する調査研究, 鳴門教育大学研究紀要, 第17巻, 2002, 55-63
- 12) 棟方百熊他, 養護教諭におけるパソコンの使用に関する調査研究, 教育保健研究, 第12号, 2002, 117-125

A study about recognition of school nurses for personal computers

- Comparison of a user group and a non-user group of a personal computer -

Hokuma MUNAKATA* and Kimiko NAKAYASU**

(Key words: school nurse, health room, personal computer, user, non-user)

We did recognition investigation of a school nurse about a personal computer. A result about recognition about a personal computer is following five items.

- The person who replied that there was some weak point consciousness for a personal computer exceeded 80%.
- About recognition about a change of general personal computer use after now, the person who replied that it would be suddenly increased exceeded 50%.
- For the question that "How will you corresponding to use of a personal computer as a school nurse", the person who replied that using positively exceeded 60%.
- If personal computer course for a school nurse was held, the person who hoped for participation exceeded 90 %.
- The person who replied that "I thought that a personal computer was necessary for a health room" exceeded 90%.

* Naruto University of Education

**Tokushima University, Faculty of the Integrated Arts and Sciences